

インタビュー

あがたやすし

縣 康先生に聞く①

聞き手・註釈 伊藤俊太郎

(一九八八年十一月二十五日収録)

編集 山中一弘

縣 康…一九〇六〜二〇〇〇年

◆静岡県生まれ。一九三〇年東京商科大学卒業。

◆富山薬学校教頭を経て、三二年から立教大学で商業概論、銀行論、銀行会計などを講じる。三七年、教授。

◆四四年、立教理科専門学校教授、同生徒部副部長に就任。

◆四五年、GHQにより公職を追放されるが、翌年五月、同司令部の解除により立教大学に復職。四八年、立教高等学校設立にさいし、同校教頭に就任。五三年、同校主事、五八年、同校校長。七一年、定年退職。

◆在任中は立教学院評議員・理事を歴任。七二年、英国サセックス州に立教英国学院を創立し、理事・校長に就任。七三年、校長を退任し、院長として、東京で同校の基礎強化に努めた。七五年から八一年は、香蘭女学校の理事・校長も務めた。

——先日は昭和一一年のころからお話を伺い始めまして、戦争中のことをお伺いしました。この前、お話をお伺いしたのは、たとえば小島茂雄先生のこととか。

縣 小島校長。

——それから、遠山郁三学長のお話をちょっとお伺いしました。それから戦争中、憲兵だとか特高に立教はだいぶにらまれたり、先生も身辺をかぎまわられたというお話を伺いました。戦争が終わるころまでのお話をお伺いしたものですから、今度は戦争が終わってからのところをとというふうに考えております。

おそらく大学生は学徒出陣で出ていっている。だから、残っている者は工場か何かに動員されている状況だと思えますが、戦争が終わってから戻ってきた様子などもお伺いできればと考えております。

やはりいちばん気になるのは例の追放のことです、

一〇月に追放の命令が出たというあたりのところもお伺いしておきたいと思います。先生は追放されるようなことをしている覚えはないのだということで抗議なさいまして、追放令がいちばん先に解除されたのが縣先生だと覚えております。そのような追放にからんだこともお話を伺えたらと思っております。

縣 昭和一年のストライキ事件〔木村重治学長がチャペルだことを不敬として起きた〕の話をこの前しましたね。それから学則の変更、昭和一七年。

——学則の変更のところはお伺いしませんでした。

縣 そうですか。遠山学長〔一九三七〜四三年立教大学学長〕のときに学則の変更をやったんですよね。学則の変更をするということは、立教としては死活の問題ですよね、寄附行為の変更〔一九四二年理事会決議〕ですから。立教中学校にいた佐藤正義〔一九四一〜三年教諭〕さんと大学にいた小沢という哲学の若い先生です。親戚関係です。そういう人たちが遠山学長に対して学則の変更、寄附行為の変更を迫ったわけですよ。皇道哲学に基づく教育をせよということで寄附行為が変更になったんですね。「キリスト教に基づく教育」を施しているところを「皇道主義に基づく」かな、何かというふうに変わったんですよね。言葉ははっきり覚えていませんが、寄附行

為を読めばすぐわかりますよ。

——「皇道の道にのっとり〔正しくは『皇国ノ道ニヨル』〕とか何とか。

縣 そうそう。そうです。「のっとって教育を行うを目的とする」か何か、そういったように、要するに「キリスト教」という言葉を抹消して「皇道主義に基づく」というふうに変えたということですよ。

そのとき、その2号館の2階に教授室がありまして、あそこところで教授会があったんです。その教授会に遠山学長も来て説明がありました。「寄附行為を今回、変更いたしましたから。」それでみんな黙っていたんだけれども、そのときぼくが言ったんです。「寄附行為の変更ということは、私立学校にとっては死活問題じゃないですか」と。「私ども学生時代に、財団法人の寄附行為の変更は問題ないけれども、目的を変更することはできない〔寄附行為第二案附則〕というふうに大学の講義で聞いたんだが、その財団の目的を変更するというのは、いったい差し支えないのですか」とぼくが聞いたんです。そうしたら遠山学長が、「その点については専門家である三橋さんにもよく確かめました。」三橋という大審院の判事が大学に講師でいたんです。大審院の判事というのは今で言えば最高裁判所の判事です。三橋久美という人ですが、「三橋さんにも確かめたが、

それは差し支えないということであつたから」と、遠山先生はそういう答弁をしましたね。ぼくはそれは納得できなかつたんだけれども、それをあえて追及すれば、結局学長以下当局者はみんな非常な苦境に立つわけですから、「ああ、そうですね」。

そのとき遠山さんが、「しかし、寄附行為の変更はしますけれども、キリスト教の布教とか活動とか、そういうものを禁止するわけではありませんから、そういうものは大いにやってください」ということは言いました。たまたまそのとき、遠山さんのお宅は江古田にあつたんですが、キリスト教懇話会というのを始めていたんです。あれは昭和一六年に始めたと思はるんですが、そのノートは学院にあります。キリスト教懇話会の記録ですね。あれを見れば出席者の名前が全部書いてありますからわかりますように、第一回の会合を遠山さんの江古田の自宅で行いました。そのとき高松チャブレンとか菅岡吉さんという人たちが出席しまして、あのとき阿部三郎太郎さんがいたかな。覚えていないが、山縣(雄杜三・司祭)さんという教授が神学院にしまして、山縣さんは出ていましたね。少数でしたね、七、八人いたんじゃないかな。記録は恩田君(学院本部職員)のところにありますから見てください。

そしてキリスト教懇話会というものを学内でやりましょ

う。細々だけでも、学校の中にキリスト教の灯を消さないようにしましようということでもそういう会合を初めて、二か月か三か月に一回ずつ細々とやつたわけです。第一回の会合はとにかく遠山さんの家でやりました。第二回以後はライフスナイダー館でやつたと記憶します。そんなんでやつたんですが、昭和一七年の三月(一八年三月)、遠山学長が退陣して、三辺金蔵(一九四三了五年学長)さんがそのあとの学長になったわけですね。そのときにはすでに寄附行為に従つて学則も変更になつて、皇道主義に基づく教育を行うように……。

あのときは、今の「校宅」一一号館、学院の本部があるあの上の二階の右側のほうに遠山学長の学長室があつたんです。その学長室につながつたところに食堂がありまして、そこで大学の教授連中が昼食をするような部屋があつたんですよ。ぼくは昼飯を食べようと思つてそこへ行つたら、遠山学長ががが議論していらんです。何だろう、いったい何やつてるんだらうと聞いたら、遠山さんに対して佐藤正義とかああいいう人。佐藤正義氏とのお父さんですよ。あのお父さん、何していた人が知らんけれども、二人で遠山学長に、徹底して立教は皇道主義の教育をすべきであるというふうなことを盛んに言っているんですよ。それでぼくは、遠山さんも大変だなと思つた。そうしたらそこへ配属将校の飯島大佐が入つて

きて、ぼくがこう腰掛けたら飯島大佐はそこへ腰掛けて、軍刀をこうやってっているんですよ。

その奥の学長室で遠山学長と佐藤正義ががながんやっている。ぼくはそこで飯島さんと二、三話をしたんですけど、飯島さんの考え方はおもしろいんだ。「だいたい立教大学だとか聖路加病院なんてものは、アメリカの陰謀によってできたものだ」「ああ、そうですね。あなたはアメリカの陰謀で聖路加病院ができたとおっしゃいますけれども、じゃ、聖路加のトイスラー院長が勲三等をいただいていらっしゃいます。あの勲章は陰謀の功績ですか」と、ぼく、言ったんですよ。そうしたら、そこへ遠山さんが出てきまして、真っ赤に上気した顔で出てきたけれども、「君、場所が悪いよ、場所が悪いよ」って言うてね。そういうこと言うなというわけよ。だけどぼくは若気の至りと言えば若気の至りだけれども、筋の通らないことを言うやつには何でも反駁しないと気が済まない性分だから、「聖路加病院と立教大学は敵国の陰謀によってできたものだ」と言われますと、「何を言うんだらう」という気になっちゃうんですよ。「じゃ、トイスラー院長が勲三等をおもらいになったのは陰謀の功績ですか」と聞いたんです。別にそれに対する答えは当然ないんですけども、遠山学長がぼくに、「君、場所が悪いよ、場所が悪いよ」って言って、その話はそれでおしまいになっ

たんです。あの当時はとにかくキリスト教関係のものは本当に異端視されていましたからね。

そんな状況で遠山さんがやめたのが昭和一七年の三月〔八年三月〕ですから、そういう出来事があったのは一七年（一八年）の一月か二月ごろですね。だから、あの時分にはすでに飯島大佐は来ていたんだな。で、飯島大佐という人は終戦までずっといましたからね。風貌が乃木大将に似たような人でして、そして「狷介」という言葉はああいったような人を形容する言葉かもしれない。何となくやかましくて、ちょっととしたことでもすぐ文句を付ける。立教大学新聞に、そのころはだれが書いた文章か、山鹿素行がこう言った、福沢諭吉がこう言ったと書いてある。山鹿素行先生と福沢諭吉のごときを同じ段に書くとは何事かというので、発行停止になったことがあるんです。当時の新聞が一部でも残っていればわかります。発行停止になったからぼくのところには取ってありませんが、そういうこともあるぐらいやかましかった、雑音ばかり多くて。

このあいだ文化勲章をもらった河盛好蔵氏があの当時フランス語の教授で立教に来ていましたが、「立教不自由の学府だな」なんて言っていましたよ。そういうときがありました。河盛好蔵という人はフランス文学をやった人ですから、キリスト教徒に対して理解は持っていた

でしようけれども、根はあの人は皇道主義というか、右翼的な考えの人ですね。「天皇様に帰一し、奉ればいいんですよ」と言ってるね。ですから、天皇様一本でいいんだという考えでしたから、終戦後どういうふうに変わったかなと思って、ぼくはあの人、あまり好きじゃないから書いたものを読んだことがないんですけども、戦争当時はキリスト教なんかに対しては非常に反対的な言動をした人ですよ。それが戦後、自由主義になって、どういうふうに向向したかぼくは知りませんが、それが文化勲章だから妙なものだよね」なんて、このあいだ思いましたね。

それで昭和二〇年の一月か二月ごろですね。当時、学長であった三辺金蔵さんはいつも小さいブリーフケースというのかな、小さい四角いカバンを下げてひょこひょこ歩いてくるんですよ。いま図書館があるところに昔は通用門があって出入りできたんです。そこからいつものように三辺さんがひょこひょこ入ってきて、当時の学長室は今の旧図書館の下にありました。遠山さんのときは学長室は校宅一一号館にあったんですが、三辺さんのときは昔に戻って旧図書館の下にありましたね。そこへ入って、そして「ちょっと辻君を呼んでくれ」というわけで、辻（莊二）さんが呼ばれたんです。辻さんは当時、予科長をやっていました。予科長兼立教大学特設防護団長と

いうやつなんです。辻さんは特設防護団長みたいなことが好きだったですね。（笑）辻君を呼んでくれということとで、辻さんが「何ですか」と入っていった。そうしたら、「辻君、防空壕はできているかい」「防空壕はまだできていませんね」「ダメだよ、君、防空壕を早くつくらなくちゃ」「防空壕をつくるにはふたが必要ですよけれども、ふたにする材料がなかなか見つかりませんからね」と辻さんが言ったら、「そんなの、君、どこかにないかい」「チャペルの器具でも壊せばできるでしょうけどね」と辻さんが言ったら、「君、それ、壊せ。じゃ、チャペルを壊して、腰掛けを全部壊して、それで防空壕のふたをつくって早く防空壕をつくらなきゃダメだよ。軍のほうで査察に来たら、君、『立教大学は防空体制が全然できていない』なんて言われると困るから、防空壕を至急つくれ」「それじゃ、やりましょう」というので辻さんが音頭を取って、チャペルを壊したわけです。

——平屋の。

通用門を入ったところに、一つの部屋が大学の学生部、一つのほうが理科専の生徒部、二つ部屋がくっついて向かい合わせにあったんです。そこにぼくはいたんで

すよ。そうしたら辻さんがやってきて、「みんな愉快そうにやっとなるわ」なんて言っていましたよ。当時の防護団の学生たちがとにかくそのへんにいる学生をみんな使って、チャペルの板をはがして防空壕をつくろうというわけですから、みんなワッサワッサやって、チャペルのあれ(ビュートスクリーン)を壊したんです。「みんな愉快そうにやりよるわ」なんて、辻さんが言っていました。

それで、あそこのイチョウの木のある旧図書館の前の、いま芝生になっているところへ防空壕を二つつくった。それから時計台をくぐって向こうへ行って、すぐ出た左右とフジ棚のあるところと両方へ左右並行して防空壕をつくったんです。その上にチャペルを壊した板を持ってきて掩盖をつくったわけです。それが終戦の後、チャペルを破壊したということになったわけです。破壊の元凶はもちろん三辺学長だけれども、実際に行動隊を指揮したのは辻さんですよ。

一〇年ほど前、何年だろうな、アメリカで終戦直後のいろいろな資料を何万点と公開したんです。その中に立教大学関係の資料がどかっと出たものですから、毎日新聞の記者が辻さんのところに早速取材に来たんです。「あのチャペルを破壊したということについて、辻さんはどう思いますか」と質問したんですね。そうしたら辻さんが「チャペルなんて目に見えるものは、別にそんな

に大事だとは思っていなかった。宗教というのは精神的なものですから」というふうなことを答えています。

マッカーサーの本部からは、「おまえはアメリカの聖公会が好意を持って寄付したチャペルを壊した。けしからんじゃないか」と言って追放で追及されたときなどは、「まことに申しわけありませんでした」と言って謝ったほうですけれども、その後、三〇年たって、時代がすっかり変わってから、「チャペルを壊すなんてのは、別に宗教的に大した意味はない。あんな形に出ているものはいいんだ」というようなことを辻さんは言っています。そういうところが何となくぼくなんかには割り切れないような感じが残るんです。

とにかくチャペルをそういうことで壊した。それで昭和二〇年になって、立教中学のほうへは(四月の空襲で焼失した)豊島区役所が事務所をつくったですね。そのとき豊島区役所が管理していた非常時の食料、たくわん、梅干、乾パンなどの置き場がないものだから、立教大学に持ってきて預かってもらいたい。チャペルのあそこに空間があるから、あそこへ置いとけというわけで、そこへ積んでおいたんです。その積んであったところを、昭和二〇年の一〇月一三日(二〇日)かな、ポール・ラッシュが先頭で、ソープという准将が……。准将というのは少将の次の人なんですね。准将というのは日本にはな

かったですね。准尉というのはありましたけれどもね。

——准尉はありましたね。大尉、少尉、准尉。

縣 少尉になり切れない人。アメリカには准将というのがあって、准将ソープというんです。「HOBPでしたね。[田]かな。ポール・ラッシュが先頭で、ジープでやってきたんです。そして立教に当時いたのは久保田君のお父さん。

——正次先生。

縣 久保田正次（当時立教大学教授）さんですね。それから根岸さん。

——由太郎先生（文学部、一般教育部教授）

縣 根岸由太郎。あのとき三辺さんがいたかどうか、ぼくは知りませんが、おそらく帆足さん（秀三郎、中学校長）がいたんでしょうね。案内したんでしょうね。ぼくはそのときは立ち会いませんから知りません。あとで聞いたんです。それでポール・ラッシュがやってきて、「ここを開ける」と言っただけでチャペルを開けた。そうしたら異様なにおいがつーんと鼻をついて、たくあんや梅干が積んであるものだから、「何だ、これは」「これは戦争中にどうにもなりませんで、こういうことになりました」と言っただけで説明したんだそうですね。これは根岸さんに聞きました。『どうにもなりません』というのはどういうんだ。あなたの方の考えによっては、どうにでもなるところ

があるじゃないか」「いや、戦争でございますから、もうどこもかしこもこういうふうになりました」「そうか。じゃ、ちょっとこっちに来い」というわけで旧図書館へ行って、「ここを開ける」。そこを開けたら、そこは御真影の奉安室ですから、紫の幕が掛かっていて、ゴミひとつないきれいな部屋になっているんです。昔の図書館に入った右側のところですよ。今でもあるいは鉄格子が入っていますかね。

——入っていると思います。

縣 ねえ。「ここは何だ」「これは御真影の奉安室でありまして、ここは日本臣民としてはこうせざるを得なかったんです」「天皇の写真を君たちが大事に思えば、こういうふうにきれいになっていくじゃないか。チャペルについて、なぜおまえたちは同じような考えを持たないんだ」「はあ」なんて言って、もう説明の言葉がなかったんですね。

そのときは根岸さんの話ですけども、ぼくにはちょっとわからなかった。あのときはソープがこんな天皇の写真なんてものは、便所の壺の中にたたき込めと言いました。そのとき根岸さんが「ダンヒル」とか何かという言葉を言っていました。ぼくにはダンヒルだかドンヒルか何だか知らない。それが便所の壺だという意味だというのは辞書を引いても出てこない [dunghee: 糞、こやし

の山」。ぼくの聞き方が悪いんでしょうが、とにかく根岸さんが私たちに説明するときに、ソープが「そんなものは引き下ろして便所の壺へたたき込め」と言われた。

それで、あとは三辺学長の話ですよ。一〇月の一二日か一三日か（二〇日）にその人たちが見に来て、一〇月二四日付で立教大学一名を追放するという指令が出た。そして三〇日に今のメーザー・メモリアル・ライブラリー、昔の古い図書館の下にあった教授室にみんな集まってくださいというわけで、終戦直後で集まりは悪かったんだけれども、とにかくたくさん集まりました。

そのとき帆足さんと三辺さんが立って、追放指令の話をしました。そのとき三辺学長が「御真影を便所へたたき込めと言われた。それは日本臣民としてはできません。で、私はひそかに御真影を持って田園調布の私の家へ持ち帰りました。そして、だれも寝泊まりしたことがない私の書斎をきれいにしして、そこへ現在奉安してあります」と説明しましたね。

そしてとにかく一名、追放になったんだ。追放指令には、「おまえたちは宗教の自由を侵害し、チャペルを破壊した。かくのごときバンダリズムはどうい許しがたいことである」。「バンダリズム」なんてありましたね。「よって今日以後、下記の者はいっさいの教育関係の仕事に従事することはできない。いかなる公職にも就くこ

とはできない。それから立教学院関係のところに入り込むことは許さない。何か三つか四つかありましたね。嚴重なあれが出て、「こういう事態になりましたから、残念ですけれども本日をもって私たち一名は立教を去ります」。帆足さんと三辺さんとそういう挨拶をしまして、その会は解散になりました。

そのとき、亡くなった高松（孝治、チャブレン・理事など歴任）さんがぼくのところにつかつかと寄ってきて、「縣さん、あなたがバンダリズムを発揮したとか、そういう野蛮的な行為をやったということはおかしいですよ」と言ってくれまして、「先生、こういうときはどうしたらいいですかね」とぼくが言ったら、「アメリカ人は自分の合点がいかないというときは、さっそく抗議を申し込む」と言うんですよ。「アメリカ人はそういうことに對して非常に寛大な国民だから、あなたが納得がいけないというのなら、さっそく抗議を申し込んだらいいです」ということだったんです。

それでぼくは、「そうかな。じゃ、抗議を申し込むかな」と思って、それからとぼとぼと池袋の駅のほうへ歩いていった。そうしたら途中で大須賀（潔、教授、総長を歴任）君がやってきて、道々話しながら帰ったんですけれど、「先生、これはYMCAの齊藤先生にでもご相談になったらいかがですか」というわけですよ。それ

でぼくは、それもそうだな。斉藤さん（惣一、YMCA同盟主事）という人はアメリカに逗留していたんだから、斉藤惣一さんにもいっぺん相談に行こうと思って、翌日、斉藤総主事を神田のYMCAに訪問したんです。そうしたら斉藤総主事、朝のコーヒーを飲みながらスターズ・アンド・ストライプスを開けて読んでいましたよ。そこへぼくが入っていったら、「なんだ、縣君、どうしたい。立教は大変だな」なんていう話。「それで実は先生、お願いに来たんです。マッカーサー本部へ、『私はこういうことはやっていません』というのを言いにいきたいんです」と言ったら、「それはいい、行こう、すぐ行こう」。あのとときの斉藤総主事は早かったな。「とにかく行くこう。」

で、お茶を飲み終わったところで立ち上がった、一時ごろかもしれんな。美土代町の青年会館からマッカーサー本部があった第一生命までは、歩いてもうそう遠くはないんですよ。あそこを歩いて行っただけですよ、斉藤さんについて。そうしたらポール・ラッシュがいましたね。斉藤先生がぼくに言うんですよ。「縣君、君ね、『ラッシュさん』なんて言っちゃダメだよ。彼はいま陸軍少佐で、えらい勢いで来ているんだから、昔の自分の同僚みたいな顔をして、『ラッシュさん』なんてことを言っちゃダメだ」と言うんです。「何て言うんですか」「あれはメー

ジャーだから、『メージャー・ラッシュ』と叫びなさい」「わかりました。では『メージャー・ラッシュ』と叫びましょう」。行って会って、「私はこういうことに対して、この指令を受けることはできませんから」「じゃ、君がそういうことを書いて出さなさい」ということだった。

そうしたら斉藤総主事が、「縣君、ぼくの事務所に着って、タイプストがいるから、それに打たせればいいから、すぐ書いて出したまえ」ということだったんです。それにしても高松先生にもいっぺん相談して、それからにしようと思ひましてそのまま家に帰った。高松さんの家は西荻窪で私の家とすぐ近かったんです。高松さんに相談して、自分はこういうものを受けたいわれないということを書いて、それを懇意な人に英訳してもらって、一人でポール・ラッシュのところに持っていったんです。そうしたらポール・ラッシュが、「よし、じゃ、おまえのためにファーマー・インベスティゲーションをやる」。すなわち調査してやるうということになりました。翌年の昭和二年五月八日に追放解除になったんですけれども、その一〇月の末から翌年五月まで月給は入りませんし、将来は何もないでしょう。何も公職に就くなら、教員になることは絶対に禁止だということですから、生きる方法がない。生活の方法が立たないわけです。そうしたら帆足先生が、「縣君、お互い大変だよな。

神山君という立教の卒業生の同級生がいて、神山君の丸三製紙というのが千住にあるから、ぼくはそこへ行って少しずつ仕事をもらってやってるんだ。もし君、よかつたら丸三製紙へ来て、あそこの若い人たちに商業簿記と商業概論を教えてやってくれよ」「それはありがたい。私は春日部の先に疎開しています。南千住なら毎日通りますから、じゃ、丸三製紙へ伺いましょうか」。それで行って、神山さんのところで「月二〇円、アルバイト料をあげますから」と。それで助かりましたね。あそこで追放解除になるまで、なつてからもちろんしばらくは行きました。あのときは月々二〇円もらって、ありがたかったですね。

追放になった人間には退職金はいっさいやってはいかん。恩給もいっさいやってはいかんという指令があったですから、何ももらうことはできなかったんですよ。だけれど学院で、それじゃ一人みんな困っちゃうだろう。だから一〇月一日に退職願を出したということにして、そのときにもう退職しちゃったということにして退職金を出しましょうということを理事会で決めて、みんなに退職金を出したわけです。

ぼくは「退職金、もらいません」と言ったんですよ。「いま抗議文を出していますから、ぼくは退職しないんだから」と言って、それで退職金は返したんですよ。

うしたら、田中シンゴさんという人が学院の事務局にいまして、ライフスナイダー館で言いましたね。田中さんが、「縣先生、そんなこと言わないで受け取ってくださいよ」と言っていましたけれども、「でもいま私は抗議を申し込んでいますから、それが解決するまではちょっといただけませんか」と言って、そのときの退職金と恩給の一時金か何かで合計五四〇〇円ぐらいでしたね。

それを学院に預けて、せっせと追放解除の運動をやったんです。文部省に行つて、田中耕太郎さんというのが当時の初等中等教育局長をやっていますね、田中さんのところへ「文部省からもひとつ何とか話をつけてください」と言ったら、「これは君ね、今こういったようなのがあって困っちゃってますよ。いちおう聞いてはおきますけれども、どうなるかわかりませんよ」なんてね、そんな話を。文部省の初等中等教育局長が、「いま忙しいから会えない」なんて言うけれども、しょうがない。出てくるまで待ってますからというわけで、そうしたらそのうち便所へ田中さん、行くというので出てきたから、くっついて便所へ行つて一緒に立つて、便所で立ち話。変なものですね。おもしろいね、考えてみれば。

ぼくはあとにも先にも、田中耕太郎さんに会つて話をしたのは、便所で一緒に用を足しながら立ち話をした、あれがいつぱいですね。その後、あの人は文部大臣になつ

て、最高裁の長官なんかになりましたよね。あのときの文部大臣がここ〔立教中学校〕の卒業の前田多門さんでしたね。

——ちょうどそのときの。

縣 昭和二〇年ね。前田多門さんにも会いに行っただすけれども、彼はいなくて会えなかったんです。何もないから、どこへでも行っただんですよ、ぼくは。文部大臣だろうが何だろうが、とにかく会える人には片っ端から会った。ポール・ラッシュのところにも何回か行きました。「おまえみたいに勇敢に来るやつは、日本人じゃ珍しい。(笑) 日本人はマッカーサー司令部から、『おまえはこうだ』と言われると、『はあ』としちゃって、ろくに弁明も何もしないから、かえって困るんだ。おれが正しいと思ったら、正しいことを主張したらいいじゃないか』って言われました。あんたと一緒に追放になった金子の解除の申請書もこれだけあるんだけど、これは解除することはできないんだ」と、ポール・ラッシュがぼくに言っていました。「どうしてですか」と言ったら、「あれは立教大学を卒業し、アメリカ聖公会のおかげでアメリカへ留学をした。その金子が、あのチャペルを壊すときの学生部長である。恩を仇で返した。ああいうのの追放を解除することはできません」なんてポール・ラッシュが言って、「これが金子の文書です」と。

そのときのぼくに関する文書なるものが、このぐらいはあるんです。それが占領軍のときのアメリカのいろいろな文書を公開したら出てきた。それを調査研究しているのが明星大学の児玉九十さん。明星大学に山本礼子さんという助教授かな、いまして、その山本礼子女史が、戦後の進駐軍、占領軍の教育政策の研究をしているんです。たまたまそこへ立教大学のケースが出てきて、「先生の名前がたくさん出ているから、いっぺん会って話を聞きたい」というので2、3回来ましたよ。セントポールズ会館で昼飯を食べながら、話したことがあるんです。そのとき、ぼくに関する進駐軍の当時の資料をコピーしてもってきてくれたんですが、そのコピーをどこへやっただんだか、見当たらなくなっちゃいましたね。今日みないなときを持ってきてお目につけられないと思います。ですけども、残念ながら見つからないんです。だけど原本はありますから、またそのうち、もういっぺん山本礼子さんに頼んでコピーをもらおうかと思っているんですけど、あのときはいろいろなものをちゃんと取ってあって感心しました。ポール・ラッシュが自分の部下の兵隊さんに、今日午後2時とか何時とかにリッキョウ・ユニバーシティーのミスター・アガタがここへ来る。来たら、このことを彼に告げよということを書いた小さなメモがあるんですが、そんなメモまで全部取ってあるん

です。そのコピーをもらいまして、偉いものだね。こんなメモまで取ってあると思いましたね。

ですからいま申しあげたことは私のいいかげんなあれではなくて、昭和二〇年一〇月二四日に発令になったんです。そのときがジャパンプタイムス、スターズ・アンド・ストライプス、そういった新聞に出ています。

その新聞は国会図書館に行けばあります。立教の追放問題についての記事をお調べになる場合には、国会図書館の昭和二〇年一〇月二五日か二六日かの新聞に「イレブン・リッキョウ・オフィシャルス・デイスチャージド」と書いたタイトルで詳しく出ています。名前がみんな出ていますよ。ドクター・サンベやプレジデント……。ミスター・ホアシとか。ぼくの名前は「プロフェッサー・コウ・オガタ」と書いてあるんです。それでぼく、冗談で言ったんです。「これは『コウ・オガタ』だから、ぼくじゃないんだ。ぼくじゃありません。オガタというのがいるか、いないか知らんけれども、「ぼくじゃないから」と言ったら、「ダメだよ、君。そんなこと言ったって」。久保田さんが翻訳するときに、翻訳の間違ひなんです。

その後半年間ここで再調査をやって、五月八日付で文部省に対して立教大学の教授職なる者は、調査の結果、平和主義者であることが判明した。よって日本政府は彼

をただちに元の原職に復せしめよという指令が出ていたね。それで追放問題は、ぼくに関する限りは解決したんです。それで六月一日から立教大学その他、ぼくは、うちへ来い、うちへ来いというところがあったから、そういうところから六月一日から行ってもいいことになりましたね。

金子さんの何かは、ずっと遅れましたね。二四〜二五年ごろじゃないですか。それから大部分の人たちは、三辺さんや帆足さんなどは平和条約の発効と同時に解除になったんじゃないかと思えます。

これが立教大学に関する追放問題です。

——ちょっとお伺いしてよろしいですか。ソープとラッシュが来たというのは、場合によると非常にタイミングよくやってきた。ある程度学校の内情を知ったうえで見たらきたというふうに取れないこともないんです。そのあたりのところは、もちろんポールはもともと立教の先生だから来るのは当たり前ですが、来訪が、「こういうふうになってんだよ」ということの予備知識をどこからか受けて、それで確かめに見きたんじゃないかというような印象をちょっと受けますが、いかがでしょうか。

縣 追放になった中のある人たちは、ポール・ラッシュがあんなによくわかるはずがない。だから、彼が立教にまず先にやってきて、あるいは立教に来なかったかもし

れないけれども、立教関係者何名かに会っているんです。そのときに、「立教はひどいそうだが、どうしたんだ」という話を聞いて、そういう人から、戦争中こういうなで、こうこうこうという話をポール・ラッシュが聞いたんだ。だれがそんな話をしたんだろうかということになると、揣摩憶測があるんですけども、いちばん手っ取り早いところは菅さんだ。菅田吉〔文学部長〕さん。それから高松さん。いちばんポール・ラッシュと親しかったから、そういう人たちではないか。

ぼくは高松さんをよく知っています、高松さんはぼくに対して、「あなたがあの中に入っているのは、あれは間違いですよ」と繰り返してましたから、高松さん、菅さん等はきつとポール・ラッシュと接触はしたでしょうけれども、もっとほかに、あまり好意的でない人たちもいたんだろうと思うんですね。それがだれか、ぼくにはわかりませんけれども。ある人が菅さんに会ったから、「追放になってひどい目に遭った」ということを言ったら菅さんの顔色が真っ青になっちゃったということとを言う人がいました。菅田吉さんなんかはポール・ラッシュと親しくしていましたから、戦時中の立教の状況をポール・ラッシュが知ったという場合、そういう人も一つのルートでしょうね。

揣摩憶測ですから何とも言えませんが、とにかくそう

いうニュースを耳に入れた人が何人かいたということはお事実でしょうね。そうでなければあんなにわかるはずがないですから。

——あとポール・ラッシュは、立教学院の理事になったんですか。

縣 理事になりましたね。

——で、拡張計画のほうをいろいろやっていらしたようですが、追放ということの中心がラッシュで、それからあとで理事という、それで何かしりが立教の中に残らないかなというように、それがちょっと考えられるんですが、その点、先生、何かお感じになりますか。

縣 ポール・ラッシュが立教の復興計画を立てる。そしてこの裏のずっと上がり屋敷〔現西池袋「丁目あたり」〕のへんまで買収しちゃって、立教の用地にして拡張しようという案を立て、その地図までできたのを、ぼくは見たことがあります。ですけれども、あれは法律が出まして、戦争中に焼けた焼け跡を買収することはできないという法律ができましたね。疎開をしたときに土地を売ったというふうな人も、戦後、売った人が、あれを返してほしいと言った場合には返さなければいけないという法律ができました。ですからすぐ裏にあった歴史家で有名なヤネソウさん？の家も全部焼けてしまったんです。このへんずっと買収してやろうというポール・ラッシュの案が

あることはあったんですけども、あの法律が出たために買収が事実上できなくなっただけですね。あのとき買収ができれば、立教は本当によかったんでしょけれどもね。

——いわゆる狐塚と言われていたあのあたりですね。

縣 そう、そう、ずっとあのへんを狐塚と。そうですね、狐塚というところです。あそこに畑がありましてね。立教大学の予科の学生が勤労作業と称して、あそこへ行つてサツマイモをつくりたりしたことがあるんです。その監督に行ったことがあるんですが、うっかり土をやったら、中にガラスがあつて膝を切っちゃいましたね。「君、破傷風になるぞ」なんて脅かされた。あの時分には薬がないし、何を塗ったかな。赤チンだったかな。何か塗つて破傷風は免れましたけれども、大変でした。学生も大変、先生も大変。

——それからあとに池袋第五小学校の跡を買収した。買収したわけですか。

縣 池袋第五小学校は昭和二〇年五月二四日（四月一三日の誤り）の晩に焼けたんです。大空襲で池袋が焼けました。たまたまその日、ぼくは防空当番で大学にいました。二〇年の二月、三月は栄養は悪いし、寒いし、防空当番をやると寒くてかなわなかったですよ。今の経済学部研究室、こっちに文学部があつて、こっちに経済学部

がありすね。あれの一階の入った二つ目の部屋あたりが防空当番の……ワシが羽を広げたような聖書台の前にありましたようなもの、ああいうものを持ち込んで、あそこで火を焚いた。天井のわりあい低い部屋で、火鉢があつて、その中に木をくべて、ぼんぼん燃してあつたわけですから、煙でいっぱい、あの部屋は真っ黒になっちゃつたですね。

——あそこはもともとは寄宿舎。

縣 昔は寄宿舎。あのときはあれは何になつていたんだろ。寄宿舎じゃないですけども、あの二階は研究室になつていたんでしょね。一階の入った二つ目ぐらいの左側ですよ。あそこところで火を焚いては暖を取つた。空襲警報が出ると、「それ！」というわけで、みんな芝生の中にある防空壕に飛び込むといつたようなことをやっていますね。ぼくなんか、「爆弾が落ちてもしようがないから、防空壕なんて入らなくてもいいや」なんて言つて部屋にいて雑談なんかしていたんですが、ドイツ語の番匠谷さんの何かはよく一緒にあそこでダババながら。野球もやりました。

そして五月二四日（四月一三日）の晩。その日は五月（四月）ですから、もちろん寒くなかったです。何時ごろですかね。あまり夜遅くなかつたな。六時か七時ごろでしょうね。空襲が始まって、ドカンドカンなんて落ち

るんですね。爆弾は落ちるし、焼夷弾は落ちるし、本当にばらばら落ちる。と同時に第五小学校の校舎がバーンと燃え上がりましてね、すごかったですね。大学の今の法学部の建物〔五号館〕のあそこです。あそここのイチョウの木のところあたりにぼくはいたんですけども、目の前で二階建ての木造校舎がボンボン燃えるんですから、本当にすごかったですね。

そのとき、ぼくは御真影を背中に背負っていたんです。ぼくは防空当番だから、御真影を焼いてしまったら三辺学長に悪いから、背負うようにしたズックの袋の中に御真影が入っていたんです。天皇皇后両陛下、それから教育勅語をリュックサックを背負うように背負って勅語を持って陣頭指揮ですよ。そのうちに第五は焼ける。それから神学院が焼ける。ものすごい火で大変だったですね。ここでおれたちみんな死んじゃうかもしれないなんて。そのうち池袋のほうから焼け出された人たちが群れをなして、前の道を千早町のほうに向かっていくわけですよ。それから立教大学の正門から「中に入れてください、入れてください」と来るんだけど、「ここにいたってダメだから」と言って、なるべくみんな入らないようにした。みんな荷物を背負っていますから、荷物を背負って狭いところに集まったら焼け死ぬというのは、ぼくは関東大震災で本所の被服廠の経験がありますから、ぼく

自身もやけどしたんだから、火災は二度目ですから、「荷物を持っている人は絶対入ってはいけません。荷物は門のところに捨ててきなさい」ということにして、捨てて単身で入る人だけとにかく中に入れて、そしてできるだけ早く千早町のほうに避難するように勧めたんです。ぞろぞろと入ってきて、結局みんな向こうのほうに行ってしまったね、あまり向かい側の火がすごいから。

そのうち飛行機が一機落ちました。ぶるぶるとこんなになりながら、B 29が落ちましたね。あとで聞くと、板橋の日大の病院のある、あのへんにおこった。あそこるところにスケルトン、骸骨の絵を描いて、ここでアメリカのソルジャーが何名死んだという進駐軍が立てた表札がありましたね。あれはアメリカ人がいちいち調査に来たんです、日本人によって殺されたんじゃないかと。あそこるところにB 29が一機落ちたんですね。落ちたそのへんは全部焼けちゃってますからね。

で、第五小学校は完全燃焼、神学院も完全燃焼〔校宅は残。不思議に立教大学は残った〔西側の校宅は焼失した〕。焼夷弾が旧体育館のへんに一発落ちたそうですけれども、みんな消しちゃったんですね。ですからこの学校の中は、どこも焼けるところはなかったんですね。

あとで聞くとところによると、うそか本当か知らないけ

れども、アメリカの兵隊が立教と聖路加と乃木神社の三つは焼かないという方針で爆撃した^{〔米軍作戦任務報告書には、その記載はない〕}という話があります。真偽のほどは知りません。乃木神社は本当だったらしいですね。

——立教と聖路加はアメリカのこととわかってますけれども、乃木神社というのは、アメリカでは乃木さんのことを尊敬していたわけですか。

縣 マッカーサーが非常に。マッカーサーは日露戦争が終わったあと、お父さんがフィリピンの司令官で、お父さんに連れられて、お父さんの副官をやっていたんです。で、日本を訪問したわけで、大山元帥とか乃木大将とか、ああいう人たちに会ったんです。それで、このあいの戦争のあとで、「日露戦争のときの日本の將軍はみんな立派だった。今回の戦争はどうして日本の將軍はこんなにならしないんだろうか」と言ってマッカーサーが嘆いたそうですね。

それでマッカーサーは、乃木さんの屋敷は焼いちゃいかん。あるときソ連の兵隊が一部東京に来ていたんです。ね。その連中が乃木神社は昔のステッセルの敵だ。乃木の屋敷を焼いちゃまえないので、乃木神社、乃木さんの屋敷へ押し寄せてくるという風聞が立った。それでマッカーサーはすぐに憲兵隊を派遣して、あそこを警護したということが本に書いてあります。

だから、マッカーサーが解任されてアメリカに帰る直前、夫人と子供を連れて乃木神社へ行って、あそこに木を植えて帰ったんです。その木が今ありますね。アカシアじゃなくて。

——ハナミズキか何かですか。

縣 ハナミズキを持ってきて、乃木さんの屋敷に植えて帰った。それほどマッカーサーは乃木という人に敬意を払っていた。

あの時分にはB29の爆撃も超高空からやるのではなくて、かなり低空に来てやっていたからね。日本の高射砲はもう届かない。日本には飛行機がないという観測がよくわかっていましたから、B29は非常に低いところを飛びましたね。人が見えるぐらいの低空まで来て、飛んだB29がたくさんありましたね。大きな図体で二〇〇機ぐらい編隊^{〔夜間低空でB29は編隊を組まない〕}でガーツと飛ぶんですから、ものすごかったですね。こういう物量の国と、よく戦争を始めたものだな。日本のアメリカ駐在武官なんてのはいったい何をやってたんだろうと思いましたね。

このあいだロンドンへ行って、宿で本を二、三冊読んできたんです。日本の本ですが、『聖断』という本がありますね。

戦争が終わったときの天皇陛下のご聖断で終戦ができたといういきさつを細かに書いてあるんですが、あれを

読んでみますと、どうして日本はこんな惨めな戦争を始めたんだらうか。そして最後まで、あややって陸軍が抵抗しようとしたというふうなところに、日本は救いがたき病人であったなという感じがしましたね。

第五小学校はそうして焼けて、あれはどこへ引っ越したか知らないけれども、引っ越して、跡を立教に譲るというので、あれは立教が買った。それから神学院の跡も立教が買った。神学院のあとは、赤レンガの瓦礫がいっぱいありました。

——赤レンガの建物はチャペルだったんですか。

縣 チャペルだけでなく、教室も若干あったんじゃないですか。いちおう木造の建物でしたね。ぼくの家に神学院の写真がありますけれどもね。あの赤レンガなんか瓦礫を片付けなければ運動場に使えないというので、立教高校の生徒たち、久保田君なんかやったんじゃあないかな。高校と中学の生徒に体育の時間に片付けさせようなんてことで、一つずつ運んでは向こうの隅に持って行って積み重ねて、片付けたんですよね。で、あそこの整地がだいたいできた時分になったら、大学の学生が来て、「これはおれたちの運動場だ」なんて言って野球をやったり何かして横暴するものだから、高校生がぼくの部屋にやってきて、「先生、大学の人たちが来て、ぼくたちに『どけ』って言うんです」「しようがねえやつだな」って

言ってるね。「よし、じゃ、行って話してやろう」。行って「君たちはなんだ。これは中学、高校生が整地して、きれいにして使えるようにしたところに君たちが入ってきて、『おまえたち、どけ』とはなんだい」と言ったんです。そしてひょっと見たら、小学校の福島震太君なんかいた。(笑)それで野球をやっている大将、「君はいいいだれだ」と言ったら、「ぼくは八代だ」。後の神戸の八代主教ですよ、八代欽一(「欽」はこの時代在学してない。弟の八代崇の誤りか)。昭和二五年ぐらいのときですから、あれが大学の四年ぐらいかな。「なんだい、君は八代主教の息子かい。福島君、君がいてこんなことじゃしようがないじゃないか」と、ぼくは言ったことがあるんですよ。彼は覚えているかどうか知らんけれども、とにかく二五年ごろ、そんなことがありました。

そうやってあそこをきれいに整地して中高であそこを使おうとなって、大学も当然一緒に、時間を決めて使うようにしようということにしたわけですけれども、あれはけっこう歴史がありますよ。

——新制の小学校、中学校を義務教育にしてという新しい制度になって、新制が発足するのは、公立の学校ではおそらく昭和二二年の四月からだと思いますが、立教の場合には一年あとの二三年に中高を分離いたしましたね。そうですかね。公立小中は二二年ですか。

——はい、公立の小学校、中学校、つまり義務教育の学校は二二年から。そして公立の高等学校は二三年からスタートしました。

縣 そうですか。

——立教の場合には、おそらく旧制の立教中学校を新制の高等学校と中学に分けたわけだから、たぶん六年生まで行くところでもってちょうど真つ二つに分けたという感じだと二三年という数が合うんですが、その間はどんな……。

縣 そのときのいきさつは、ぼくはまったく知りません。あ のとき小中高といっせいに出発しましたか。

——はい。

縣 大学は一年遅れましたね。二四年から。

——二四年でした。ですから私は旧制の予科で入りまして、途中で新制に切り替わりました。

縣 そうですか。そうすると二八年卒ですか。

——はい、大学、二八年です。

縣 じゃ、久保田君なんかと一緒ですね。

——卒業年度は一緒です。

縣 そうですね。英国（立教英国学院）にいる宇宿君だの大学の足立（後の大学職員）だの恩田（後の大学職員）だの、あの連中はみんな予科に入って、一年で横すべりで新制に入ったのね。

——はい。花の二八会とか言って、二八年卒がずいぶん多いんだそうです。ちょうど大学が拡張しているときに卒業したものですから、二八年の卒というのが多いんだろうと思います。

縣 予科一年で終わるときに、カンニングをやったのと、病気になるって出なかったのと、成績不良であった者、この三つの種類の生徒が二八名落ちたんです。

——切り替わり目のところで。

縣 予科がなくなっちゃって、その二八名の生徒の持っていたいき場所がない。それで佐々木喜市先生（二九四八〜五三年、高等学校主事）に、佐々木順三さん（二九四六〜五五年まで、立教大学総長、立教学院院長、立教小学校、中学校、高等学校長を兼任）のほうから、「この二八名を高校のほうで引き受けてくれませんか」。それで佐々木喜市先生が「いいでしょう」ということで引き受けてきて、ぼくは教頭だったから、「縣さん、大学の二八名のこういう生徒を引き受けてきましたから」「いいですよ」。それで引き受けた。ところが中学から来た小木さんにしても村井（達三、立教高等学校教諭）さんだの、あの先生たちで、そういう人たちを担任するクラス主任をやりましようという人がいないんです。そういうのはどうせ暴れん坊とかね。相だなやつがいるだろうな。それで、「縣さん、あなた、やってくれますか」「ええ、やりますよ」とい

うことで、ぼくが引き受けて、時計台の下の小さい部屋に入れて、「これ、ぼくのクラスだから」というわけです。やったんですけれども、その連中が不満でね。「おれたちだけ落として、なんだ」ってわけですわ。

——大学から高等学校ですから、格下げという感じですね。

縣 そうなんですよ。それで、「あの小川のやろうが癩に触ってしようがない。番匠谷って、あいつはいやなやつだ。」あれは予科長だから。小川さんは学生部長だから。それで「何とかしてやりたい」と言うから、「それじゃ、君たち、行って、番匠谷さんの横腹でも何でも蹴飛ばしてくりゃいいじゃないか」と言ったんですよ。

「そんなに腹が立ってしようがないなら、行って一発やってきましたらいいじゃないか」。理学部の四階の大きな教室だったけれども、二八名集めてやったんですよ。ついに、そんなことを言って文句を言った人はいなかったけれども、とにかくあのとき殺気だっていましたね。癩に触ってしようがない。自分の同級生はみんな大学の帽子をかぶって行くでしょう。自分たちは中学の校庭に高校生として集まる。後ろのほうを大学生が往復するものだから、かわいそうはかわいそうだったけれども。

だから、このあいだも一人、ここに尋ねてきて会いましたよ。「どうだい、その後」と言ったら、本当に無邪

気というか、気持ちはさっぱりした連中が多かったですよ。「先生ね、どうもぐあいが悪いんですよ」「なんたい」「何かのとき、履歴書を書けて言われるんですけれども、立教大学予科に入学。またその次は立教高校三年に入学なんて書かなきゃならない。(笑) あれ、先生、何とかありませんかね」と言うから、「そんなことは書かなくなっちゃっていいんだよ。立教大学入学だけでいいから、それでやるときゃいいんだよ。そんなことを調査するやつはいやしなから」。

とにかくそうやっておいて今度は高校三年を終わって、高校の二回生と一緒にすわね。で、大学に編入するとうわけ。そうしたら、「先生、高校から大学に来る人たちは全部入学金を取るようになっていきますから、あの生徒たちの入学金を高校で一括して集めて納めていただけませんか」なんて秦さん(当時学院職員)がやってきた。それでぼくが「何言ってるんですか。ああやっていっぺん入学金を納めて大学に入ってるんだ。あなたのほうで落としたやつを高校で引き受けさせて、またその入学金を集めてこいとはいったい何ですか。あなた、自分で来て集めなさい。集めたら、高校のほうに特別編入したんだから、編入の入学金を高校に納めたらいいでしょう。高校のときには入学金を取れとは言わないで、大学へ来るときに重ねて取ろうという根性がおかしい」とぼくは

言ったんです。それで結局取らなかったんですよね。
——取ったら二重取りですものね。

縣 二重取り、かわいそうに。そういうこともありませんから、ぼくなんか、大学には何かという文句を言うてうるさいやつだと言ったかもしれないけども、今だっ
てぼくは言うんですよ。大学が志木の土地をみんな使う
と言うから、「そんなことをしないで志木へ立教中学を
移して、大学はここを全部接収してやったらいいでしょ
う」と言ったら、ダメだ。尾形総長（一九七五〜八二年大
学総長、「ダメだよ、縣さん、そんなのは。志木は大学
が使うんだ」「じゃ、立教中学校をあなた方はどうす
るんですか」「中学は向こうに移す」「大学が勝手にそんな
ことを考えちゃいけませんよ。中学を向こうに移すのな
ら、このところの中学の施設や土地は一〇〇億ぐらい
大学で払いますか」と言ったら、それは返事なしね。浜
田総長（一九八六〜九四年大学総長）もそうなの。一昨年
の七月二四日に言いに行っただけです。「志木へ中学校
を移したらどうですか。そして、あそこの残りは三万坪
あるんだから二万坪ぐらい。一万坪でもいいや。中学に
やって、高校と一緒にして四万坪にして、あそこに中高
一本化した学校をつくって、一万坪こちに取っただけ
で、できたら東武鉄道の話があって一万坪。もう少し奥
のほうへ、五万坪ぐらい土地を交換してもらったらいい

でしょう。そうしたら将来、大学は学部一つぐらいでき
ますよ。このところを全部本当に再開発して、大学の
新しい構想でやったらどうですか。中学の建物をみんな
取り壊しをやってやったらいいでしょう」。ダメだとい
うんですよ。「とにかく大学は志木を使うから」と言っ
て。

その後という計画を立てたかと思っただら、「各学部が」
一週間にいっぺん要る（使う）というんですね。一週間に
いっぺん何が要るんだらうかと思っただけです。学院の
ほうも、大学のほうを見たら、いろいろな委員会ができ
なければ、新座のカリキュラムを編成する委員、経済
学部はブランクになってね。それから何とか委員会、経
済学部、ブランク。あれ、もっと全学一致して、やるぐ
らいじゃなくちゃダメですね。

中学校をどういうふうにするつもりか知らんけれども、
中学の発達のために志木をあそこへ行って、広々とした
ところで高校も文句を言わない、中学と仲よく一本化し
てやるようにして、先生たちが一緒にやればいいんじや
ないかとぼくは思うんですけれどもね。

——臨教審とか文部省で六年制の学校というようなこと
を言い出していますけれども、立教のような学校だった
ら六年制の学校がいちばんつくりやすいはずなところな

んです。

縣〔立教〕女学院もそうなっている。香蘭女学校なんか、初めから六年制ですよ。先生たちが一年ごとに交代しますけれども、お姉さんと妹みたいになっていきますから、仲がいいですよ。中高は先生たちがだいたい融合しないんじゃないかと総長が言っていたけれども、そんなことありませんよ。大学がしっかりして、中学、高校をこういふふうにしてやってこい。その代わり高校を終わつた者は全部大学が喜んで引き受けるというぐらいにしてやればね。今みたいに高校でできないから試験をやる。「そんなことをやって、どこに効果があるんですか」と、去年の懇話会でぼくは言っただけですよ。

——中学が志木のほうへ移れるときに移っておかなかったのは、非常に痛恨の極みですね。

縣 もっと早くね。ぼくは花房さん（一九四五〜五八年中学校主事、五八〜五九年校長）にも高橋さん（一九五九〜七二年中学校長）にもずいぶん言ったんだけど、「いや、中学はここでけっこうでございますから」って言うから、どうにもしようがなかったですね。

——いま高等学校に行きましても、池袋時代の先生方はツーカーで話を通じるんですけれども、向こうへ行つてから就職になった先生方は、場合によると顔を初めて見るような。これはお互い同士のことだと思えますので、

やっぱりその点が話を通じないという。

縣 そうなんですな。

——親近感が。

縣 今は、ぼくが行っても知らない先生が半分ですから、ぼくの顔を見ても知らん顔していますよ。一七年間だけでも、ずいぶん変わったものですね。惜しいことしたな。中学、高校を一本化すればよかったのに。そうすると財政的にもいいし、いろいろな面でもいいと思っただけですね。

——旧制の中学校ですと最上級生は五年生ですから、上級生が下級生を指導していろいろな動きができる。けれども新制中学の三年間というのは、最上級生の三年生が自主的に一年生、二年生を指導してやっていくというのはちょっと力量不足なんですな。ですから、中高一本であれば高校生が中学生を指導して、中学生にいろいろなことが身につけていくんです。

縣 そうでしょうね。

——文化祭にしてもそうです。

縣 中学二年生といつても子供ですからね。今の高校二、三年になれば、われわれの経験からしても中学の五年ですから、しっかりしてきますよな。

——以前、高校が池袋にいたときには、文化祭共催というかたちで、高校の委員長が中心になって中学のほうに

もいろいろ指示をしたり呼びかけたりして、面倒を見て動かしてくれたんですが、それができないから、いきおい中学校としては教師が。生徒には自主性を持たせてとか言うけれども、現実には三年生はそれほど経験を積んでいませんから、教師がいろいろとお膳立てしてやっただけで中学生を動かせる。そういうことしかできない。

縣 そういうような中学や高校に対するこまやかな認識と愛情ってものが、学院全体に欠けているんですよ。だから、そのことを去年の懇話会で言ったんですよ。「もう少し大学は下級の学校に対する愛情を持たなくちゃいけないんじゃないですか。一貫教育なんだから、全然一貫教育になっていませんよ。そういうことになるよ、昔の大学はもっとよかったですよ、あったかくて」という話をした。「いい話をありがとうございます」と言われたけれども、礼ばかり言われて実行しなくちゃしょうがないですよ。ぼくはいつもそう言うんだ。「あなたがおっしゃるとおりですよ」「あなたね、おっしゃるとおりだと思ったら、実行する努力をしてくださいよ」。

さあ、時間、もう、おいとましましょう。

——どうもありがとうございました。

縣 いいえ、どうも。
そのうち、志木のあそこを取得したいきさつを書こう
と思っっているんです。

——お願いします。いろいろとそういう話を聞かせていただかないと。どうもありがとうございました。

※①②ともに、明らかな事実誤認は註で改めた。話者の推測の部分は、当時の話者の認識としての資料価値にかんがみ、そのままとした。文責はすべて編集部にある。

インタビュー

あがたやすし

縣 康先生に聞く②

聞き手・註釈 伊藤俊太郎

(一九九〇年一月十九日収録)

編集 山中一弘

—— お願い申しあげたとおりでして、校舎〔中学校第一校
年落〕をつくるときの高等学校と中学校のどちらのほうが
というのは変な言い方ですが、どの時点で中学校が使う
ようになったかというあたりのところをちょっとお伺い
したいと思ひまして。

縣 校舎は、そこに旧館〔大正一五年落成の中
学校校舎 旧12号館〕があります
よね、本館が。中学の校舎は、これが最初にできたん
ですね。これできて、それから図書館があることができ
て、それからここが、その向こう側ですね、できたんで
しょう。

—— ここが最初で、その次に、いま第二校舎と呼んでい
ますのが、何回かに分けてつくってありますので。

縣 あれは二回にわたってできたでしょう。

—— ですから向こうの今の理科の教室のところまでの西
側の部分が、これの次に。

縣 ああ、そうですか。

—— その次に、高等学校の図書館のある建物（一九五六
年落成）ができました、それからこっちにつないだとい
う……。

縣 ああ、そうですか。なるほど。

昭和二三年に高校と中学が新制で発足しまして、二三
年は佐々木喜市先生が主事で、花房主事とか高橋教頭と
いう人たちとよく話し合いをやっていまして、二三年と
いうのは私は高校のことにほとんどはタッチしていな
いんですよ。佐々木先生はさっさと自分でやっちゃう人
ですから。

—— 主事が。

縣 ええ。私は埼玉県の春日部のほうへ疎開しまして、
そこから通うものですから、朝あそこを六時前に出ない
と八時半の大学の授業ができないでしょう。それ以前に

は来られませんか、高校へ来ると結局八時半。終わりのまもなく早く帰らないと、遅くなっちゃうと真っ暗になっちゃいますから。そんなので佐々木先生が主として中学との折衝をやって、小木さんがあのときは教務部長だから、小木さんがその補佐役みたいになっていましたから、私は一言で言えば、ちょっと浮いたかっこうになっていましたよ。別に苦情を言うわけじゃないですけども、実情はそうなっていました。したがって二三年に中学と高校がどうい話をしたかということは、私はまったく知らないと言っています。

二四年になりまして、大学の予科一年で入って進級のできない生徒が二八名います、それが立教高校に逆に編入になったんです。時計台の下の小さな教室で、その連中を高校三年の第四組ということにしてやっただけですよ。ところがこれが大学でもカンニングをやったり、勉強はしない、遊んでばかりいるような連中が半分以上いましたから、なかなか手に負えないんですよね。それで佐々木先生は、「縣さん、こういうのを佐々木総長から『ぜひ高校へ頼む』と言われたので、しようがないから引き受けてきましたが、この担任は、あなた、やってくれませんか」と言うから、「やりましょう」と言って、それを引き受けた。

ですから、二四年からは私は高校にかなり入りました。

ですけれども、やはり小木、佐々木両氏が中学との折衝は主にやっていたから、中学校の校舎が焼けた二五年の3月ごろまでは、中学と高校との話し合いみたいなことは私はほとんど深く知りません。あの校舎が焼けちゃって、あそこには、あの時分、小学校が一時入っていたと思います、あの木造校舎には。

——はい、あれは新制がスタートしてから最初の一年間ぐらいですから二三年度ですね。

縣 二三年と二四年ぐらいいましたか。

——二四年にちょっとかかったぐらいで、小学校は年度から言えば二三年度のあいだに全部きりが付いてしまいました。

縣 ああ、そうですね。小学校の第一期生があそこへ入ったわけですね。

——そうですね。

縣 そうですね。それであそこが空いて中学がそっちを使う。高校は主として今の12号館。

——今12号館と呼んでいます。

縣 そうですね。あれを使う。あれは狭くしてしようがなく、理科の実験室を中高共同の教員室にしました。それから学友会館、向こうに柔剣道の部屋がありますね。ああいうものは共通に使う。それから地下のあそこも中学と共通に使いましたよというふうなことでやっていました。

こんなんじゃない狭くてしようがない。だから高校はどこかへ引越しましよという話を佐々木先生としたんです。それが二六年の……。二六年あたりになりますと中高かなり親密になりました、中高連絡会というのがしょっちゅう開かれまして、話し合はしたわけなんです。

その時分に問題になったのは、向かい側の神学院のグラウンド。焼け跡をどうするかということで、とにかく中高の生徒は体育の時間は瓦礫を片付けようというので、あれをやったのは二四年ごろでしょうね。せつせと片付けてきれいになった。そうしたら大学から、あそこは中高も使うし大学も使うんだと入ってきたから、「何を言ってるんだ」と言ったことがあるんですが、とにかく共通に使いましようということとで大学との関係は、神学院グラウンドを中心に、まず二六年の初め時分からやっただけです。

それから二六年六月に中高の同窓会が共同でありました。そして中高同窓会ということで一本化しましよというので初めて二六年六月一日に合同の決議をしまして、最初の会長を佐野正綱さんをお願いした。それから中高、何かと共同するような機運になりました、学院債募集等も一緒にやりましようということになったんです。

この時分に、二六年七月二日に一号館で学院の評議員会がありました。あのとき、佐々木喜市先生、佐々木主

事が高校は将来新しい校舎を求めていきたいということを発表しました。ところが佐々木（順三）総長をはじめ、だれも返事をする人はいなかったです。冷ややかでした。その年の九月一〇日に、私は佐々木喜市先生と「先生、高校をどこかに引越しましよ」という話をいたしました。そのときに「中学の校舎も新しくつくったらいいんではないでしょうか。高校も自分のあいだは中学と共同で使う図書館を一緒に作りましよう」というので、あそこへ新しい校舎（一九五六年完）をつくりました。ですからたぶん、あの教室も一部、高校三年のときから使って、図書館を主に中高共同で使ったと思います。

——そうです。
縣 狭かったですけれども、共同にいたしました。この時分、つまり二六年九月から、高校の移転問題というのが高校の中では議題になった。しかし大学の佐々木総長は、「高校が移転するなんてとんでもない話だ。そういうことはいかん」という強い考えがありまして、そういう強い反対意見がありました。

それで二七年になりました、二七年一月一日に佐々木喜市先生と私と二人で主事室で話したときに、学院の一本化ということをやったらどうでしょうか。慶應とか青山学院などは学院が一本になって、中心に塾監局とか本部というものがあって、そこでやっているの、立教

もそういうかたちにしたらどうでしょうかということをして七年一月一日にいたしました。したがってこの時分から、中学と高校がずっと一緒にいようという考えは私どもの中ではなかったんです。

で、二七年五月二五日に佐々木総長を訪問して、校舎を何とか高校のために考えてほしいという申し入れを私をしました。その年の六月二五日、当時の事務局長じゃない、何て言いましたか、名倉理事。

——財務理事ですか。

縣 財務理事ですね。あの方は常務理事でいたわけですが、名倉さんを訪ねまして、財団〔財政か〕の一本化と高校の校舎移転の相談をいたしました。そして二七年七月二二日に、学院債を発行して、中学、高校の財源にしようではないかという話が出ました。このへんから、学院債を中、高、たぶん小学校も一緒にやろうという話になったと思います。

そして二七年八月一日に学院債発行の実行委員会というものが結成されまして、学院債実現に入っていくわけです。あのときの学院債の金額をぼくは覚えていませんけれども、たぶん六〇〇〇万か八〇〇〇万かぐらいだったと思います。

そして同二七年八月二五日に学院債の第一回の募集を始めました。その学院債を発行するために中高小の父兄

会（PTA）の幹部、会長、副会長というような人たちが学院に集まりまして、学院債発行の話をしたわけですね。そのとき私は、「高校としては校地二万五〇〇〇坪ぐらい、校舎も十分な校舎をつくりたいと思っています」という話をしたら、佐々木順三総長が非常に怒りまして、「縣君、何を言うんだ。そんなことは学院の理事会でもどこでも話が出たことはありませんよ。そんなことを君が言うのはおかしい」ということでしてね。それで「ああ、そうですか」ということで、そこはそれで収まったんですけども、そのとき一緒にいた林源一さん〔立教中代会長〕がそのことを「私に」非常に強く共鳴していらして、あの方、亡くなるまで繰り返し言いましたね。

あのととき（総長は）、えらい強く、「立教高校はよそへ行っちゃいかん。ここにいてこそキリスト教精神で教育ができるんだ。地方に引越すなんてことは考えたら、立教の建学の精神が薄れちゃうからいかん」。こういう話だったんです。

で、私は、「そんなことはありません。むしろ建学の精神が将来薄くなるんじゃないかという心配が持たれるのは大学じゃありませんか。高校はそういう心配はありません。必ずキリスト教精神に基づいてやりますから」と言ったんですけども、「とにかくそういうことを君が言うのはおかしい」ということで終わりました。

だからこの時分から高校では、ここへ中学が校舎をつくりまされども、この校舎を高校が使うという考えは非常に少なかったんです。「将来、高校は、あんなちっぽけなところに中学と同居しているなんてことは考えない。できるだけ広いところを求めて移りますから、中学のほうでここをフルにお使いになるということにさせていただいてけこうです。ただし現在はいなくちゃなりませんから、共同で使いますけれども」ということでありました。

ですから、伊藤先生のご質問にあります「いつごろからこうなったか」という点につきましては、ちょっと漠然として覚えていませんけれども、二七〜二八年ごろから高校はよそへ移るという考えでしたから、この校舎を高校が使うという気持ちはほとんどなかったと言っています。

そのうちに昭和二七年に、佐々木喜市先生は京都の池の坊短大の学長になって行っただです。ところが順三先生は、高校をもう少し何とかするまでは喜市さんにやってもらわなければいけないというような考えを持っていましたから、何とかしてここへ引き止めたいということで、二七年から二八年までは、名目は喜市先生は主事ですけれども、実際にはこっちにいません。京都に行っちゃっていますから、何かやろうたって主事がないわけな

で、私がやりました。佐々木主事は京都の池の坊短大に一年いて二八年に帰ってきましたけれども、そのときは先生は高校に帰るといふ意思はまったくありませんで、二八年の四月から私が高校の主事ということになったわけです。

それから一途に言っているのかどうか、校舎を広いところにつくろうということを考えました。そして花房主事にも何回となく、「どうですか。高校と一緒にもう少し広いところに共同引越しませんか」という話かけをずいぶんしたんですけれども、「中学はそういう考えは全然ございませんから」ということで、花房先生の考えは終始変わりませんでした。

昭和三三年七月、東武鉄道が今の新座の土地を立教に寄付しようということになったんですが、あれが東武鉄道の土地ではなくて農民の土地です。「東武が買収するわけにいきませんから立教学院で買収してください。その買収の資金は私どもで出しましょう」ということで、一億二千何百万かを東武が立教学院へ寄付してくれたんです。そのお金でもってあそこを買収しましたが、実際、買収の手続きというものは、立教学院では私と村田一也君（当時学院職員）の二人で農林省との交渉等々いっさいやりました。

だいたいそんなようなことですから、先生のご質問に

ぴったり合っていないかもしれないかもしれませんが、いつからそういう議論が出たのかということは、別にもう話し合いをするまでもなくというわけで、高校はここにある教室をあえて使おうということは考えておりませんでした。したがって学院債を募集して、その学院債を中学の校舎が使いましたから、それを中学が償却するというかたちになったわけです。高校は新座へ行きましたから、あっちの経費は高校が自分でやりますからということをやってきました。

あの学院債の募集に際して林源一さんが非常に骨を折ったということで、林さんに二〇万だか三〇万だったか、お礼をしたわけです。それに対していろいろな批評をする人がありまして、「林さんは『おれがやった、おれがやった』なんて言うけれども、そういう報酬がほしかったからやったんじゃないか」なんていう批評もずいぶんありました。林さんは、二〇万か三〇万ですけれども、それでその門を中学に寄付したんです。「私はそういうものはいっさいもありませんから」ということで、あの門を林さんが寄付した。林源一氏寄贈という記録が学院に残っていると思います。

あのとき中学と高校と、財政その他一本化という話はずいぶん出ましたけれども、結局、いま一本化すると大学に金をみんな持っていかれちゃうという懸念がありま

して、それは特に強く言ったのは小学校の有賀さん（千代吉、当時小学校主事）でした。有賀さんはああいう人ですから金集めが上手でして、小学校の校舎を建築ということとさっさとお金を集めてやっちゃいました。そういう点でいちばん下手なのは花房さんでした。（笑）

——そうですね。
 縣 小学校の有賀さんは、財政を一本化すれば、結局、金はみんな大学が持ってっちゃう。大学は昭和二五年当時、財政が非常に貧困で、聖路加（国際病院）へ行って二〇〇〇万円借りてきて職員の給料を払うという状態でしたから、中学や高校、小学校が父兄から寄付金なんかもらって、それを一本化して学院に持っていったら、みんな大学に持っていかれちゃうということで、結局一本化しないほうがいい。自分のあいだは各自、独立採算でやっこう。そういうことになったんです。今一本化されちゃっているところは、一つの建学の精神、学院の一本化というような言葉で阻害されている状況ですけれども、あの当時は仕方なかったんです。

小学校でお金を集めて、学院へ持って行って学院の財務委員会へ出せば、必ず大学に行っちゃうという懸念をずいぶん持ちました。われわれもそう思っていました。大学がヘゲモニー、支配権を持っています、大学の中心が小川徳治さん（経済学部教授）であり中川一郎（文学

部教授」であり、ああいう人たちが支配権を非常に強く持っていました。ですから率直に言って、高校の先生たちもみんな小川徳治さんなんかは好きじゃなかったです。というようなことで、そういうのが結局感情的に学院との一本化を妨げたんですね。

ですからあのとき、もっと強力な中心人物、たとえば学院長とか、当時は総長と言いましたが、総長がもう少し強く、「おまえ、そういうことを言ってもダメだよ。あれは高校で使うんだ」というふうに上手に学院として決断してくれる人がいれば、あの当時も私だの佐々木喜市先生はそういう話をしきりにやっていたんですから一本化できたと思いますけれども、そういう強い指導者がいなかったところに、それができない理由があったんですね。

たとえば高等学校の主事を決める、中学の主事を決めるというようなとき、中学で決めるんじゃないで大学の部長会で決めてくるんです。ですから高校の佐々木先生がいなくなると、私になるまで一年間ブランクがあったんですけれども、そのときは大学の部長会で決めてくるという状況でした。ですから高校の教職員会議規程をつくったんですが、その中に高校のことは高校で決める。職員会議規程で決めるという条項を入れたんです。あれは大学で決めて、こういうふうには決まったからと押しつけられたんじゃないから。

浅越さんの時代になって、あの条項を書き変えましたね。

——そうですか。

縣 覚えていませんけれども。

——だいたいご質問のあったところは、そんなようなところですか。

——ありがとうございます。

縣 ご質問は二十七年のときまでになっていますからね。

——はい、そうですね。

縣 二八年の一月からの問題が一つありましたが、いま申しあげたことでほぼ尽きていると思います。

——はい、わかりました。そうすると、最初にこの校舎ができたというころの計画の段階では、まだ昭和二三年から二四年ぐらいにかけてだから、もっぱら佐々木主事と花房主事のあいだで話されていたことで、縣先生はほとんどタッチなさっていなかったということで、この校舎をつくり始めるときの話し合いということは、先生としては特別にご存じない。

——あと木造の校舎が焼けてしまったので、これは自動的に中学が使うことになってしまったんですね。

縣 こういうものをつくらなければならなかったのです。あとの増築ですね、向こう側の。あれについては高校はそんなに強く、将来、ここは高校が使うというふうな気持ちは持っていませんでした。

——そうですか。じゃ、とにかく差し当たって狭いから、校舎、教室は要るんだけれども、高等学校としては郊外のほうに広い土地を求めていくから、出たあとは中学のほうでお使いくださいという暗黙の了解みたいなものができていたということでしょうか。

縣　そうですね。

——先ほどのお話を承って、順三総長は高校が移転するのに賛成でなかった。そうすると順三先生が総長であったあいだは、やはりそれは実現できない。松下総長〔正寿、一九五五〜六七年大学総長〕になってから、それが実現の運びになったということですね。

縣　そうですね。昭和三〇年に佐々木さんがやめて松下さんがなったわけです。

——そうですね。

縣　あのとき、だいぶ問題がありました、たとえば当時の理事の佐伯さんとかいろいろな人たちが、松下を出して佐々木さんにやめてもらおうという気持ちを持っていたんですね。ところが聖路加の橋本さんなどは佐々木さんと非常に親しい人だから、「佐々木君でいいんじゃないか」ということを言って理事会でだいぶもめたということ、佐伯さんに聞きました。

——それで八代〔斌助、一九五一〜七〇理事長〕主教が理事長で出ていって、立ち上がって、「こんなに長い時間、

議論してもしょうがない。だからどうだろう。この際、わしに任せてくれないか」と言って、八代主教が涙を流して訴えた。「じゃ、そうしよう」というので、「理事長、じゃ、結論はどうするんだ」「この際、松下君にやってもらおう」ということになったんです。八代主教という人は泣くのが上手な人です。

——そういうお話、伺ったことがあります。

縣　ワッと泣くんですよ。「あれは花形役者だ」って、佐伯さんなんか言っていましたよ。

——本当によく泣かれたというか、ここぞというところで泣かれたという話を伺っています。

縣　そうですね。ああいう大きな、豪傑みたいな人でしたけれども、泣くときは涙をいっぱい出して泣くんですよ。あれが本心なのか、あるいは芝居なのか、ぼくにはわからないけれども、(笑)とにかく。

——今の院長〔八代崇、一九八七〜九五院長、斌助の令息〕とは、そういうところはあまり似ていませんね。

縣　西村さん〔哲郎、一九七九〜八七院長等〕が中学の校長と高校の校長を兼ねていたんだから、あのときに中高を合併して新座に持っていけばいいとかなり期待したんですけれども、全然何もしませんね。

——はい。

縣　そして、ここを大学に全部明け渡して、大学は将来、

少し奥にでも校地を五万坪ぐらい買って、そこへ大学の新しい学部をつくるか、一部持つとかしたらいんじゃないですか。ここを中学が全部明け渡せばかなり広くなりますから、そこへ大学をつくったらいんじゃないですかというのを、ぼくはずっと考えていました。

ですから今の浜田（陽太郎）さんが総長になって、あれは昭和六〇年の七月かな、六一年ですかね、総長になった七月の二四日だったかな。総長室に浜田さんを訪ねて、「あなた、大学は志木へ行こうとか何とか言っていますけれども、志木へ行かないで大学をここにつくったらいじゃないですか。それで向こうへ中学を移したらいいんじゃないですか」と言っただけでも、「いや、ダメです。ここはもう校舎をつくることはできないんです」と強いことを言っていましたね。「大学としては新座の校地を使いますから」ということを言っていましたよ。「ああ、そうですね」と。

——浜田さんがそう言うのは、設置基準の関係があるわけですか。

縣 それはぼくにはよくわからないんですけども、聞くところによれば、将来、これを整地しているいろいろな建物をつくるんだそうですね。前の文学部長をやった高橋秀君などが委員長になって、何かここにつくる計画を盛んにやっているんですね。ですから、あれは浜田さんの

一種の弁解で、高校もありますし「ここへ中央棟をつくって、そこへいろいろなものを合併したらいい」とぼくは言っただけです。そして新座に三万坪空いていますから。三万坪はないか、二万五〇〇〇坪ぐらいはあります。野球部と水泳部と自動車部が行っていますから、二万五〇〇〇坪ぐらい空き地があるから、中学に一万坪やって、あと一万五〇〇〇坪ぐらいは遊ばせておけばいい。木でも植えておいたらいいでしょう。大学が順調に行けばいいけれども、財政難というような時期が来るかもしれない。恩給退職金規程もあるし、原子力研究所の借金も残っている。学院もなかなか大変だから、将来もし財政的に必要というときが起きたら、残しておいた一万坪を売ったらいいと言っただけですよ。今あそこは二五〇万ぐらいですと言いますから。

——ずいぶん上がっています。

縣 ですから何十億か何百億か金が出ますから、それで大学のまた新しいのをつくる費用に回したっていいんだから、そうしたらどうですかというのをぼくが浜田さんに言いに行っただけですけども、彼はそれを拒否して今の計画になったんですね。

ああいう状態、西村さんあたりがもっと強く計画性を持って、「将来の立教はこうやりますし」という強いイニシアティブを取ればよかったんだけど、何もし

ていませんから、結局、立教は人がいないなということですね。

で、ぼくは、「酒向さんを学院長にしてやり直したらどうですか」ということを、浜田さんが総長になったあの時分、理事の佐口君だの出浦君だの、前の理事長の朝倉さんにわざわざ言いに行ったんですよ。ところがあの人は酒向さん、きらいなんじゃないかな、ばりばりやりますから。ですから酒向さんは立教女学院の院長になっちゃって、立教のほうは西村さんで八代さん。中学の校舎もだいぶ古くなってきていますね。でしよう。

——はい。

縣 ですから、どうしても大学は向こうに行くんだということならばしょうがない。中学はいっぺん整理しちゃって、いい学校を今度は新グラウンドでも、新学院グラウンドというのをつくるよりしょうがないですね。

——はい。

縣 本当を言えば中高は一本化してやるほうがいいと、文部省もそういう方針ですよ。

——いま私立の中高だったら、たいてい一本でやっておられますものね。

縣 でしょう。文部省も教育審議会なんか、六年制の高等学校というのを考えていますよ。いま浜田さんの頭の中には中学や何かのことはいいですよ。高校の生徒が

成績が悪いということだけはありますけれども。大学の募金は今なかなか大変だと思えます。

まあ、そんなようなことでございます。

——はい、ありがとうございます。

縣 何かお役に立てば……。

「大学がもし志木の土地を全部使って大学の拡張をやるといふ計画があれば、高校はもういっぺん東松山のほうへ土地を買って引っ越しますから」と、ずっと前に河西さん（太一郎、一九七〇〜七二理事長）が理事長をやったときに言ったんです。学院の長期計画委員会というのができまして、ホテルニュージャパンで会合があった昭和四三年か四四年ごろに言ったんです。ところがみんなそれには全然興味を示さなかったですね。ですから河西さんも何もなかった人。多少やったのは、大学の紛争を治めて大学の財政を軌道に乗せた尾形さん（典男、一九七五〜八二総長）ぐらいですね。亡くなっちゃって惜しいですね。

——はい。もうそんなことだから立教はなかなか時代を先取りできないで、結局立ち遅れてしまっているんですね。

縣 ええ。中学の花房さん、高橋さんは非常に消極的な人でした。ぼくなんか積極的なほうだから、とてもまだるっこくってね。それじゃ、これで失礼します。どうも。——どうもありがとうございます。